

中村素堂

三

さて話はちよつと先へ行き過ぎてしまいました。この辺で少し戻して、恩師霞洞先生のお宅へお稽古に通っていた時分の思い出をひとつ二つ。

東京・芝の増上寺の背後は麻布の方へ上りになる。その下の神谷町の辺りで、たしか泰宗寺とかいったお寺の隣接地が先生のお住居であった。今ごろと違つて外灯の少ない時分だから、墓地にそつた横町に入ってゆく道に少々ひるんで、誰か連れのくるのを電車の停留場まで待つていたりして、笑い話にされていた兄弟子などもあった。

先生はお役所から帰られ一風呂浴びられると、おいしくご酒ご飯をすまされて二階へ上がつてこられお稽古となる。毎週床の間の軸を替えられて、西川春洞先生の大幅・小軸・聯など実に様々なものが拝見できた。欄間は先生の故郷、越前の旧藩主松平春岳侯の額、ゆつくり佳い香りの線香を一本机の端にたてて、伺つた順に添削・折帖と書いていただく。墨は早く伺つたものが日の暮れる前から磨つている。私もそのひとりで大きい硯に一晚に二十人分くらいのもを磨り溜めておいた。鋒の長い筆で丁寧（丁寧）に書いていただくのをジツとみつめている沈黙の中で、ご注意をして下さるお言葉だけが耳に残る。

間（ま）で奥様がお茶をいれて座敷（ざしき）おいてゆかれると、気持ちりがほぐれて雑談も少し出る。築地の方から来ているのが、あの遠くでやつてる三味線（さんまいせん）はなんだろう——小唄（こ唄）かナーという。門人中筆頭（もんぢゅうしゅ）の先輩鳥海鶴洞（とりうみつどう）さんは、そんなものが聞こえるようじゃダメだつと一喝（いちかく）、みんなシユンとしてしまふ。

この鶴洞老兄は年令的にも先生にちかく、宵の口から夜半まで先生の側（そば）にいて、遠くわれわれの清書（せいしょ）を見て、大分おまるをもらうなあ——なんて褒めてくれたりする。なかなかの謹厳居士（きんげんこし）だったが、酔（よ）つぱらうとカラ台（たい）なしでおもしろかつた。

先生の質問をすれば何でも知つておられてよくお話し下さつたが、ご自分から積極的にのお話はなさらなかつた。

だんだんお輪（わ）をとられると、日中のお疲れやご酒の酔いで時々居眠りをされ、ご自分で気づいてまた筆を進められるが、時々かなり字が大きくなつたりまた小さくなつたりする。しかしお手本として困るような字は決してお書きにならなかつた。困つたのは千字文などでも、二、三行とんで先をお書き下さる。鶴洞先輩に訊ねてみる。「あとから書き入れたらどうかしら」というと、「先へとんだのはちつとも習うに困らんから、そんなことはしないでいい。わしが困るのは時々あとへ戻つて同じところを書かれる時だ。これは申し上げた方がよい」といわれた（私がこのごろ、こういう風になつたのは先生の真似（まね）ているのではありません）。お稽古がすんで電車の停留場へ出ると、もう終電に近くハラハラしながら上野近くの家へ帰つたことが多かつた。早く伺つてんだから早く帰つてもよいのに、自分はまだやつていない書体・連綿（れんめん）などを先輩がやつていただいているのを羨（うらや）み眺（なが）めたり、先生のお話を伺つたりしているうちに夜が更けていた。

このころは書道展といつても一流派（いちりゅうは）の団体でやるのは皆無（みな）なくらいだった。それが春洞先生一門だけの「明治書道会展」を開催（かいさい）するとなつて、私も入門（もんねい）以前にもあつたのかなかつたのか、大正十年ごろにその書道展が芝の大本山増上寺の客殿（きやくでん）全部を使つて催された。（つづく）

『筆間雜記』中村素堂隨筆集 昭和六十三年刊より転載。

〈「書範」昭和五十六年〉